天理教の日本語教育のはじまりの頃 ②

天理教語学院日本語教育センター主任
大内　泰夫　*Yasuo Ouchi*

２代真柱の先見性

筆者が天理大学別科日本語課程（別科）に勤務したのは1986年からであるが、当時、アメリカ、ハワイ、ブラジルから来ている日系人が多く在籍していた。顔は日本人であっても使っている言葉は英語やポルトガル語、スペイン語で、授業の中でいろいろな話題について話していると、見た目は日本人でも考え方は外国人なのだということを感じた。選科時代の学生名簿を見ていると、アメリカ、ハワイ、ブラジルだけでなく、ペルー、コロンビア、メキシコなどの留学生もおり、アジアの方ではフィリピン、インドネシア、インド、ネパール、ラオス、香港など、実に様々な国から来ているのがわかる。海外にある教会の子弟や信者の子弟、あるいは現地でにをいがかかった（入信した）信仰初代の人をおぢば（天理）へ引き寄せ、日本語を習得させ、基本的な教理を学ぶことができる機関ができたことは画期的なことだったと思う。国がまだ日本語教育というものを本格的に整備もしていない時代に、こういった教育機関を教内に作った２代真柱の先見性には感服する。現在、天理教語学院に来ている留学生たちの中には、親が選科・別科時代におぢばで学んだという者も多く、天理教の日本語教育が脈々と受け継がれてきていることを感じる。

日本語教師って、英語がペラペラの国語の先生？

別科に勤め始めた80年代半ば、友人によく言われたことだが、仕事は何をしているかと聞かれて「日本語教師」だと答えると、たいていの人の反応は「え？」という感じだった。留学生に日本語を教えていると話すと、「じゃあ、英語がペラペラなんだ」とか「国語の先生のような感じ？」といったことをよく言われたように思う。まだまだ社会的に日本語教育とか日本語教師という言葉自体が認知されていなかったからだとは思うが、なかなか日本語教育と言ってもイメージがわかないのも無理はない。少し考えてもらえば分かることだが、英語を母語とする者、スペイン語を母語とする者、中国語を母語とする者など、クラスには様々な学生がいるわけで、外国人と言えばすべて英語がわかるというわけではない。私が勤めはじめた80年代半ばでさえ、日本語教育というものは一般的には認知されているとは言い難い状況であったのに、60年代、70年代であればなおさらである。

選科初期から別科の頃

『天理大学選科日本語科十周年誌』には当時のことが書いてあって、興味深い。当時の岸勇一天理大学長は、「創立十周年を記念して」という寄稿の中で、次のように述べている。「差し当たり主として日本語を教えると共に、教室における教育と寮における生活とあいまって信条教育を施して、将来海外布教の一翼をになう人材として育てるという目的を持って、この選科が発足したのであります。ところが日本語の教育をどうしてやっていくかということについて、大学に於いて海外伝道部と共に種々研究もし、また東京方面で外国人に日本語を教えている学校も視察した結果、天理大学の英米学科と国文学国語学科の教授がこれに当たるということになったのであります。しかし実際に授業をしてみると、大学の授業とのかけもちでは、充分でない面もあって、創設後数年にして、その教育のために専任の教師を置くことになりました」（２頁）。現在のように大学で日本語教育の課程が整っているような時代ではなく、とにかく授業を担当した当時の講師の方々は苦労されたと思う。現在のように研修会が盛んにあちらこちらで開かれている状況ではなかっただろうし、前例もなく何をするにも手探りの状態だったと想像できる。

激動の80年代後半

1983年、当時の中曽根首相が「教育」「友好」「国際協力」のため、2000年までに留学生を10万人受入れるという「留学生十万人計画」を発表し、国も本格的に日本語教育に関して整備し始めた。1985年に文部省（当時）の「日本語教育施策の推進に関する調査研究会」から出された報告「日本語教員の養成等について」があるが、これらを元に一般的に日本語教師養成講座は420時間、大学主専攻で45単位、副専攻で26単位という教員養成における基準ができたように思う。また民間でも、1987年に日本語教員向けの実用情報誌『月刊日本語』（アルク）が創刊されたり、「日本語教師養成通信講座」（現「NAFL日本語教師養成プログラム」）が開講されたりするようになってきた。日本語教育能力検定試験が始まったのも1988年である。また出稼ぎ目的の就学ビザ発給を求めて上海の総領事館に申請者が押し寄せた「上海事件」が起こったのもこの年であり、この事件を受けて、その翌年の1989年５月には「日本語教育振興協会」（日振協）が設立され、日本語教育施設の審査・認定等を行うことになった。当時、『月刊日本語』などからこういった情報も得ていたが、大学の組織の中にある別科日本語課程にはあまり関係のない話だとも感じていた。しかし、これらの情報は後に各種学校として開校した天理教語学院には大いに関係のあることであった。日本語教育の世界においても、80年代後半は国が本腰を入れて目まぐるしく変わっていった時代だと言える。

選科・別科時代と現在

『天理大学選科日本語科十周年誌』には講師の回顧録も数編載っているが、とても興味深い。これを読んでいると、筆者はどうしても現在の様子と比較してしまう。当初から媒介言語に頼らず日本語を日本語で教える直接法で授業を行っていたようであるが、その流れは今も変わらず、ずっと受け継がれていることが分かる。ただ、大きく違うのは選科初期の頃と比べ、格段に教科書や教材が充実していることである。現在も授業中はすべて日本語で行うが、新出語や文法を翻訳した解説本も各言語で充実していて、予習・復習にも役立ち、直接法の弱点でもある“曖昧さ”が補われている。また視覚に訴える絵教材も充実している。この例だけでも当時の先生方の苦労が偲ばれるが、それでもきっと留学生たちと楽しく学んでいたのだろうと、当時の講師の話を読んでいて思えてくる。昔も今も苦労は多いが、やりがいがあって魅力にあふれた仕事であると感じる。ちなみに現在、天理教語学院では、上記の岸学長の述べた「主として日本語を教えると共に、教室における教育と寮における生活とあいまって、信条教育を施して」という部分に関しては、すべて実現していると言っても過言ではない。